

Title	裸人形考 : 縫い着せられた衣からの視点
Author(s)	岡本, 万貴子
Citation	デザイン理論. 50 P.142-P.143
Issue Date	2007-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/52760
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

裸人形考

— 縫い着せられた衣ころもからの視点 —

岡本万貴子／京都造形芸術大学大学院

はじめに

わが国の人形文化の特色ともいえる裸形の人形とは何か。中でも「狂い・白肉人形」の体軀は、出現当初からみると次第に拡張していき、吉祥の象徴としての意匠化がみられる。

本発表は裸形の人形に人が衣を縫い着せることから「縫い着せられた衣」を視点に、それぞれの人形の裸形であることの意義を明確にして、意匠化していく裸形の人形の考察を試みるものである。

1 裸形の人形の分類

「縫い着せられた衣」の視点から、裸形の人形の種類を整理すると「着装のための裸形」と「裸のための裸形」とに分けることができる。「着装のための裸形」として、裸人形・三つ折人形、祇園祭の鉦に上っている稚児人形などがある。次に「裸のための裸形」としては、「狂い・白肉人形」がある。(今日では総じて御所人形と呼ばれているが、この御所人形には多くの名称があり、今回は人形の体軀を良く言い表している職人言葉から生まれた「狂い・白肉人形」とする)次に嵯峨人形のうちの裸嵯峨人形である。

ここでいう「裸人形」とは木彫、胡粉仕上げで目や口は彩色で描かれ(玉眼入りもある)、一般に子どもや女性が着せ替えを目的として玩んだ人形をさす。着せ替えを目的としているために、裸形のままで売られ、買い求めた人が自ら着物を縫い着せたものである。「裸人形」が裸形のままで売られていたことは、浄瑠璃や井原西鶴の『好色五人女』などの文献資料から確認することができる。

2 「縫い着せられた衣」の効果

裸形の人形と深い関わりのある、「着せ替え行為」の意義を考察すると共に、「着せ替え行為」と切っても切れない、「縫い着せられた衣」の意義を明確にするために、その出現過程と人々の関わりを見ていくと、次のようになる。

始めに「縫い着せられた衣」だけが成立する事例としての神衣祭かむろそさいにおける衣では、衣をきせることで神の形(出現)を現し、踐祚せんそだい大嘗祭じょうさいにおける衣では、儀式後の着装は天皇が巫女ないし現人神である事の象徴となる。次に民間宗教の中の「おしらさま」の衣では、毎年衣が重ねられることから、神体の年齢を現し、神体の分身として効力を発揮する。そして「仏像・神像・肖像」の世界では「縫い着せられた衣」の視覚的效果、触覚的效果によって、神仏あるいは神霊と参拝者(信者)は、更なる結縁を結ぶ事とがわかる。この衣替えは、神との契機けいぎの象徴を衣が担ってきたという、佛教伝来以前より続くわが国の祭祀行事を、佛教側が取り入れた神仏習合の形であるともいえる。この点は人形と「縫い着せられた衣」との関係を考える上で欠かすことは出来ない。なぜならその根底には、対象が聖なる領域であろうと、俗なる領域に属する人形であろうと、いずれの概念も、「縫い着せられた衣」も人々が生み出した概念があるからである。

3 日記、物語の中の「縫い着せられた衣」

「縫い着せられた衣」と人形との関係を再確認していく前に、衣が誰の手によって縫わ

れたものなのか、また人々の生活の中で（保温等以外に）衣にはどのような使命があったのかを、当時の日記文、物語を手掛かりに確認していくと次のようになる。

1) 衣を縫って神に供えることで願いが叶う、2) 平安時代美しい装束は女性ばかりでなく、男性にとっても 大切であった、3) 衣を縫うことは、女性にとって大切な仕事であった、(仕立ての専門職はなかった)、4) 布施や褒美、心情表現を衣に託すとなる。以上のことから女性にとって裁縫技術が如何に重要であったかが伺える。そして「縫い着せられた衣」は、視覚的效果、触覚的效果によって、聖なる領域と俗なる境域の棧となり、その結果から更なる結縁を結ぶ、あるいは人々の想念を結ぶということが浮かび上がってくる。

4 「縫い着せられた衣」の着装効果

ここまで見てきた「縫い着せられた衣」の重層的着装効果を軸にして、「着装のための裸形」「裸のための裸形」の人形の意義について順をおって見ていくと次のようになる。

着せ替えを目的にした裸人形・三つ折人形では、視覚的效果として着せ替えによって出現する裸形の体躯の魅力があり、触角的効果としては、「触れる・撫でる」という行為によってその感触が抱くものの皮膚を通し、日常的な温かさが深くその体内に浸透していくということが挙げられる。そしてなんといっても裁縫技術の修得である。黒田日出男氏が「子宝思想」で述べられているように、近世では男女を問わず子供の教育には多に力がそそがれていた。買い求めた人が着物を縫い着せたという事実から、遊びを通して裁縫技術を修得することは、当時の女性たちにとってたいへん重要な素養であり、裁縫は衣装が量販されるようになるまで、女性にとって大

切な仕事だったことは周知のところである。

また稚児人形・立ち児の衣装には、「見立て」の効果と格式の確保がある。幼児の体躯に能の世界や、儒教の教えなどを衣装によって語ることで、人形表現に一層の奥行きをみせている。

むすびにかえて

「狂い・白肉人形」の裸形の意義に目をむけると、仏像・神像・肖像の衣装としての着装の終焉を挙げる事ができる。それはこれまで呪術・祭祀の道具としての人形からの開放を示唆しているのである。しかしながら呪術・信仰の媒体である「縫い着せられた衣」から解放された時、人形もまた人間同様に、一糸纏わぬ分けにはいかなかった。衣装によって人が人として確立されるように、人形もまた新たな使命を担うために、吉祥の小道具を配するようになる。そこには吉祥の象徴としての人形の意匠化がみられるのである。「狂い・白肉人形」の丸々と拡張した体躯は裸人形・裸嵯峨人形の比ではない。体躯の中心からは晴れやかな生命観がみなぎり、吉祥の象徴として豊麗の美へと意匠化されていく。そして「狂い・白肉人形」の誇張された体躯の意匠化を支えるのが、胡粉仕上げの技術の向上である。幾重にも塗り重ね、磨きあげられた白い胡粉仕上げの人形の皮相は、硬質にして柔らかな光沢を放っているのである。

これまで「狂い・白肉人形」と呼ばれる裸形の人形は、黒田日出男氏が「唐子論」「子宝思想」で示されたように、江戸時代の子どもの唐子様式を写したものとされてきた。しかしながら唐子様式から離れて「縫い着せられた衣」を視点にその裸形の体躯を再考察すると、これらの裸形の人形たちが吉祥の道具をもち、縁起古事をかたり、裸形の体躯を丸々とした吉祥の形へと意匠化していく経緯が見えてくるのである。